

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K04368

研究課題名(和文) 治療的アセスメントに関する実証的研究：わが国への導入における課題と対応

研究課題名(英文) Empirical Studies on Therapeutic Assessment: Issues and Adaptation in Japan

研究代表者

橋本 忠行 (Hashimoto, Tadayuki)

香川大学・医学部・教授

研究者番号：80320000

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：Finn(2007)の治療的アセスメントは「クライアントが自分自身についてより深く理解し、抱えている根深い問題の解決を支援するために心理アセスメントを活用する」新しいパラダイムである。わが国での心理的支援をより充実させるために、効果研究による臨床的有効性の検証、グッド・プラクティスによる実践の促進、医療・教育・司法領域など各施設の実際に合わせた手続きの最適化、クライアントと査定者の関係性へ影響を与える社会文化的要因の検討を行った。EXPスケール(池見ら, 1986)などを用いた数量的・質的分析や複数の事例研究を重ねた。また「PFスタディによるアセスメント介入セッション」等を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療、教育、司法など各領域で治療的アセスメントの効果研究と事例研究を重ねることで、本邦においてもその有効性が確認された。心理検査を用いた心理的アセスメントは、単にクライアントの症状や心理的問題を評価するだけでなく、より具体的で人間性(Humanity)を大切にされた支援につなげることができる。今後、協働的/治療的アセスメントの導入がわが国でもより容易になり、幅広く国民の精神的健康や自分自身にあった生き方を見つける手立てとなると思われる。

研究成果の概要(英文)：Therapeutic Assessment(Finn, 2007) is a new paradigm in which psychological testing is used to help people understand themselves better and find solutions to their persistent problems. In order to enhance clinical practice in Japan, the following four issues were examined: (1) verification of clinical effectiveness through empirical research, (2) promotion through good practice, (3) optimization of procedures to suit the actual needs of each facility, including medical, educational, and judicial fields, and (4) cultural factors that affect the relationship between clients and assessors. As a result of quantitative and qualitative analysis using the EXP scale (Ikemi et al., 1986) and other instruments, as well as multiple case studies, its effectiveness has been confirmed. Also "Assessment Intervention Session by PF Study" was developed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：治療的アセスメント 協働的/治療的アセスメント ナラティブ 人間性心理学 質的研究 教育 司法ウェアラブルデバイス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

Finn (2007) による治療的アセスメント (TA; Therapeutic Assessment) は、心理アセスメントと心理療法の統合を志向する実践的なモデルである。「クライアントが自分自身についてより深く理解し、抱えている根深い問題の解決を支援するために心理アセスメントを活用する」目的を持った新しいパラダイムであり、その方法も定式化されている。具体的には、性格検査、知能検査、そして症状評価尺度など様々な心理検査の結果について話し合う一連の手続きを指し、発祥の米国ばかりでなく各国で関連した実証的研究が活発になってきている。また臨床の有効性 (efficacy) について Poston and Hanson (2010) は「治療的な介入を含んだ心理アセスメントの論文 17 編を対象にしたメタ分析」の効果量 $d=.423$ (中程度の臨床効果) と報告し、従来のアセスメントにとらわれている査定者はクライアントが変化する機会を見逃しており、故にこの新しいモデルが大学院での教育・研修プログラムに含まれるべきであると結論している。

2. 研究の目的

しかしながらこの実践と研究に対する、臨床心理士・精神科医師など専門職からのコメントやクライアントから声により判明したことでもあるが、本邦へ治療的アセスメントを導入するためには、以下の 4 点を検討する必要がある。

- 効果研究による臨床的有效性の検証：治療的アセスメント (Finn, 2007) の「まとめと話し合いのセッション」におけるクライアントの体験を明らかにし、心理療法としての実証的知見を提示する。自己概念の変化、そして適応の向上などを明確にする。同じく治療的アセスメントの「初回面接」を参考に心理面接を行い、ウェアラブルデバイスやビデオカメラを用いた客観的指標 (心拍・表情・音声) とクライアントの主観的体験の関連を調べる。
- グッド・プラクティスによる実践の促進：臨床的效果を挙げた事例の詳細なプロセス研究を行うことで、治療的アセスメントの各ステップの特徴とアセスメント/介入の具体例を提示し、この方法の普及をはかる
- 医療・教育・司法領域など各施設の実際に合わせた手続きの最適化：組織で勤務することの多い本邦の心理士がより短期間で実施できるような工夫、教育における特別支援教育に関連したアセスメントと保護者・教師へのフィードバック方法、そして司法における立ち直り支援を意識した手続きの最適化を行い、各領域で導入するための試行モデルを提示する
- クライアントと査定者の関係性へ影響を与える社会文化的要因の検討：各国で導入されていることからわかるように治療的アセスメントは普遍的性質を持つが、それでもなおクライアントと査定者の関係性、家族の捉え方、そして教育と訓練のシステム等には社会文化的要因の影響が現れる。それらの要因を明確にする

これらにより治療的アセスメントをわが国に導入するための課題を明らかにし、その対応策を提示したい。近年、治療的アセスメントは不安・抑うつ等の症状軽減ばかりでなく、治療へのコンプライアンスの向上、子どもと家族の関係改善など、様々な効果を挙げている。しかしながら情報収集を目的とした心理アセスメントが実施されることの多いわが国への導入はこれからである。実証的知見をまとめ、心理学的支援に直結した対応策を提示し、国民の精神的健康に寄与することを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

上述の①～④に合わせた行動計画を策定し、データ収集、分析、学会発表、論文執筆を行った。それぞれの方法を以下に記載する。

- 効果研究による臨床的有效性の検証：精神科外来を中心とする 5 事例の「まとめと話し合いのセッション (とその録音/逐語記録)」を対象に、EXP スケール (池見ら, 1986) AQ-2 (Finn et al., 1994) SEQ-5 (Stiles et al., 2002) を用いた数量的・質的分析を行った (橋本・坂中・久蔵, 2018)。また新たな試みとして、ウェアラブルデバイスとビデオカメラによる測定と記録 (心拍・表情・音声) をしながら、治療的アセスメントの「初回面接」を参考にした 5 分間の心理面接を大学生 2 名に行い、その後、対人プロセス想起法 (Kagan & Schauble, 1969; 高山, 2017) による振り返り面接を実施した (森田・橋本・神原, 2021 / 橋本・森田・神原, 2021)。
- グッド・プラクティスによる実践の促進：短期に改善した慢性疼痛の事例 (Hashimoto, 2017) における治療的アセスメントの各ステップ (「初回面接」「標準化された検査の実施」「アセスメント介入セッション」「まとめと話し合いのセッション」「文書によるフィードバック」「フォローアップ・セッション」) を詳細に検討した。また協働的/治療的アセスメントとナラティブ・セラピーの関連について理論的展望を行い、PF スタディによるアセスメント介入技法を開発した (田澤・橋本, 2018)。「標準化されたテストとしてのロールシャッハ法」

「アセスメント介入セッションにおけるロールシャッハ法の活用」という2つの視点から、複雑性悲嘆などいくつかの事例を分析した（橋本, 2021）。心理査定誤りについて「情報収集の誤り」「クライアントと査定者の関係性の誤り」があると捉え、その両者を詳細に検討した（橋本, 2019）。

- ・ 医療・教育・司法領域など各施設の実際に合わせた手続きの最適化：非行の27事例をもとに、警察少年サポートセンターにおける一回型の協働的/治療的アセスメントの実践を検討した（橋本, 2021; Hashimoto, 2021）。また教育領域ではチーム学校と心理的アセスメントの関連を整理し、治療的アセスメントによるコンサルテーションのあり方を考察した（橋本, 2020）。
- ・ クライアントと査定者の関係性へ影響を与える社会文化的要因の検討：海外からの子どもと家族の事例について、社会的文化的要因や言語的要因を考慮した治療的アセスメントの実践を検討した（田澤・橋本, 2018）。「関与しながらの観察（Sullivan, 1954）」と心理的アセスメントの関連について、協働的/治療的アセスメントの理論と技法をもとに考察した。

4. 研究成果

治療的アセスメントの効果研究と事例研究を重ねることで、本邦においてもその有効性が確認された。「2. 研究の目的」「3. 研究の方法」と同様に、以下の①～④に分けて主要な研究成果を提示する。

- ・ 効果研究による臨床的有効性の検証：

橋本・坂中・久蔵（2018）の5事例（表1）より、EXPスケールのMode値は段階3から段階6に分布し、Peak値は段階6が多かったが1事例のみ段階7も認められ、心理療法としての有効性が認められた（表2）。参考値ではあるがAQ-2とSEQ-5からは、CIの高い満足度が示された。セッション内におけるEXP値の時間的推移は認められなかった。EXPスケールの各段階におけるCIの発言内容を検討したところ、自己探索、フェルトセンスの形成、そして新たなナラティブの生成といった重要な体験が生じており、ThがCIとの関わりを把握する指標となることが示唆された（表3）。

ウェアラブルデバイスとビデオカメラを用いた橋本・森田・神原（2021）では、心拍（RRI/CvRR）の傾きの変化に注目し「そこで何を考えていたか/感じていたか」を尋ねたところ、5分間の心理面接だけではわからなかった、各指標の推移と関連した主観的な体験を被検者は明確に語る事ができた。さらに図式化された各指標は、内面の緊張-弛緩の感覚を理解/セルフモニタリングするきっかけとなっており、ある被検者は「身体が(こころを)教えてくれるんですね」と語った。この研究については、2022年度以降も継続してデータを集めている。

表1 事例のプロフィール

事例	性別	年齢	診断	MMPI	Rorschach法	その他の検査
A	男性	20代後半	社会不安	6*98*40-72/53:1# F'L?:K#	HVI(+), X-%=.42, EA=10, An+Xy=3	WAIS-III, SCT, BDI-II
B	女性	20代前半	社会不安 / 抑うつ状態	2*7*810364-9/5# FK/L?:	DEPI=6, CDI=4, C'=8, Isolation=.30	PF Study, SCT, BDI-II
C	女性	50代前半	気分変調症 (抑うつ神経症)	324-89670/15: F'?LK:	S=5, GHR:PHR=3:1, WDA%=.78, Fr=1	SCT, BDI-II
D	男性	20代前半	気分変調症 (抑うつ神経症)	7*268*9031-5/4: F-?:LK#	EB=5:2, C'=3, Zd=+8.0, Ma:Mp=2:3	PF Study, SCT
E	女性	30代前半	対人関係 (配偶者/職場) の問題	4-3/69052:18#7 F/K?L:	HVI(+), S=2, WDA%=.94, COP=2, AG=0	TAT

表2 EXP値の記述統計

事例	Mode	Peak	各段階の発言数						
			1	2	3	4	5	6	7
A	4	6	0	12	15	19	8	9	0
B	4	6	0	14	16	23	11	6	0
C	4	6	0	3	10	27	5	1	0
D	6	6	0	0	3	9	13	13	0
E	3	7	0	15	27	17	3	20	8
全体	4	7	0	44	71	95	40	49	8

表3 EXPスケール各段階毎の発言内容と心理検査結果のフィードバック

発言内容 (事例/CIの発言番号)	心理検査結果	フィードバック (事例/Thの発言番号)
段階2 「どうなんだろう。ただ俺、仕事場ではしゃべらないんですよ。友達同士だったらしゃべるんだけど」 (A/CI 50)	WAIS-III: 理解17, 単語13, 行列推理12	<パターンを読んで直感的に推論する力や言葉の能力も高い。そういった長所がある> (A/Th 50)
「胃腸は大丈夫なんですけど、ずっと前に心臓が痛くなったことがあるんですよ。循環器科では『多分ストレスによるものだろう、ストレスは検査してわかるものでもないから』と言われて」 (B/CI 13)	BDI-II: 抑うつ的身体的因子, Rorschach: C'=8	<両親の前で元気な顔を作らなくてはならないですね。身体にストレスがきてもおかしくないと思われるような...> (B/Th 13)
段階3 「母親の問題は慣れていくしか仕方がない (中略) 私は海の街で生まれたから、水泳がやはり好きですね。あと映画も好きだった。いつしかそういう余裕もなくなってきたね」 (C/CI 35-36)	Rorschach: Fr=1	<自分のために時間やお金を使うのは、主治医も仰るように、安らかな気持ちになるための必要経費かもしれない> (C/Th 34)
「なるほど。でもどういいう人を怒らせているのか、まだ私にははっきりわからないですよ」 (E/CI 32)	MMPI: 4>3, Rorschach: S=2	<怒りが小さい内に対処しておくのが、役に立つ> (E/Th 32)
段階4 「今日はすごくテンションが低くて。体調悪い時って、自分でもびっくりするくらい頭の働きの悪いですよ。思い出せなくなって、しゃべることもできなくなってしまいます」 (D/CI 16)	Rorschach: EB=5:2, PF-Study: E'=3.5, M=6	<いろんな可能性を考えているうちに身動きとれなくなる。間違いが少ないのは長所だけれども、試行錯誤は苦手> (D/Th 16)
「最低限、電話がかけられるようになりたい。少ないスタッフ間でも、怖いと思ってしまうとコミュニケーションが円滑に進まないから。でもなんか、一人が好きなんです (笑)」 (B/CI 22-23)	Rorschach: PER=7, Isolation=.30	<集団場面での安心感の少なさは、こちらの結果にも出ているようです> (B/Th 23)
段階5 「家族からも『あれまた母さん怒ったの?』と言われる。でも娘もいろいろ私を裏切ったからね。遠い原因が私たち夫婦にあるんだろうという気持ちはありますよ。でも可愛さ余って憎さ百倍みたいな、この野郎という気持ちもあって、先月少し爆発したんです」 (C/CI 20)	Rorschach: S=5, GHR:PHR=3:1	<友好的な良い対人関係を持っている一方で、こころの中には怒りや不満をためこんでいる> (C/Th 19-20)
「日によってあります。今日もそうなんですけど、攻撃的にならざるを得ないっていうか、なんかこう…、うん…なんて言うんだろう、気を張っていないとボーッとしておかしくなってしまいそうだから」 (D/CI 3)	MMPI: 27コード, Rorschach: EA=7, T=1, C'=3	<生活の経験値や、気の置けない人と親密な関係を築く力を持っている。一方で、慢性的な疲労感と感情の揺れがある> (D/Th 3)
段階6 「愚痴を言ったりとか、あんまりできないんですよ。だからそう言ってくれて、わかってくれてるって嬉しかった (涙)。周りの人が暗い気持ちになるのが嫌なんです」 (B/CI 8)	BDI-II=21, Rorschach: C'=8, DEPI=6	<普通だったら泣いたり愚痴を言ったり、八つ当たりして処理している感情に蓋をして、しんどいだろうと思います> (B/Th 7)
「悔いているなあ…大分。あの時も子どもが生まれていたら、結婚もして、酒も止めて、きちんとした親父の仕事もしていたのかもしれないなあと思って (感情が高ぶる)」 (A/CI 9)	Rorschach: HVI(+), MMPI: パラノイドの谷	<その時は、大切な恋人であっても信じられなくなっていた> (A/Th 7)
段階7 「ああ、そうかあ。ああ、そうかあ。(沈黙) 私なら1個しかとらないかもしれない。うん、自分は『本当に持って帰っていいのかなあ』と思っていたかもしれない。それをFは思わないんだ (涙)」 (E/CI 59)	MMPI: Peak 4, (子どもの行動観察)	<息子さんのF君、いつも待合室から館をいっぱい持って帰るじゃないですか? (笑) あれ、とてもいいと思います。(中略) F君は我慢していないです> (E/Th 58-59)
「ああー (納得した口調)。上司は我慢しないで好きなことを言う人。仕事では認めてくれないけど、飲み会では『幸せになって欲しいんだ』と言う。『なんで私のことずっと心配してくれるんだろう。喧嘩してたのに』と思った。すごく不思議な事件だったけど、その時、上司に対しては私も我慢してなかったんですよ。その後得意先への付添をしてくれたり、なんかそういうことが私にもあるんだと思って、すごく嬉しかった」 (E/CI 65-66)	MMPI: Peak 4, Rorschach: S=2, AG=0, GHR:PHR=6:3	<同僚と我慢せずに、本気で仕事のためにやり合っているのがいいのかなと思います (中略) 相手から見て信頼できるというか、この人だったら紹介できるというか> (E/Th 64-66)

・ グッド・プラクティスによる実践の促進 :

慢性疼痛の事例 (Hashimoto, 2017) での心理的アセスメントへの満足度は高く、IES-R は 33 点 (Cut-off の 25 点以上) から 18 点 (正常域) BDI- は 22 点 (中等度) から 9 点 (正常域) に低下していた。主観的な痛みも消失し、クライアントは「面接室でいろんなことを話せたから痛みが減ったのではないだろうか。もうしばらく、こころの虫干しに来ます」と治療的アセスメント終了後に語った。

田澤・橋本 (2018) では、ナラティブ・セラピーを援用した「PF スタディによるアセスメント介入セッション」を開発した。これは正規の標準化された方法で PF スタディを実施した後、クライアントが抱えている問題やアセスメントの問いと関連しそうな場面を取り上げ、例えば「『相手に対して怒る』ことが一般的な場面で、謝ってしまっている。普段とは違ったやり方かもしれませんが、相手に対して強気に出たり、反論する方向でまた新しい別の答えを書いてみてください」などと介入する技法である。クライアントは PF スタディの記録用紙に「最初とは違った、また別のオプションとしての答え」つまりオルタナティブ・ストーリーを記し、さらにロールプレイを査定者とともにすることで、新たな自分に気づく。例えば以下のような場面が介入の対象となる。

- ・ GCR 評定がマイナス (-) あるいは 1/2 の場面
- ・ ±1 標準偏差を超えたコードが評定された場面
- ・ 短すぎる反応 (「何で?」「嫌だな」「別に」など)
- ・ 評定不能で、U とコードされた場面

・ 医療・教育・司法領域など各施設の実際に合わせた手続きの最適化：

表4は、非行の27事例をもとに警察少年サポートセンターにおける一回型の協働的/治療的アセスメントの実践を検討したものである(橋本, 2021; Hashimoto, 2021)。司法・犯罪領域の心理的アセスメントでは、必ずしも対象者(ここでは非行少年)が心理検査を望んでいるわけではないことも多いが、そういったクライアントとの超短期型の協働的/治療的アセスメントとして開発した。「アセスメントの問いを立てる」「標準化された検査を実施する」「アセスメント介入でこれまでとは違った対処を試みる」「フィードバック面接を行う」「わかりやすい報告書を作成する」という治療的アセスメントの骨組みを、およそ2時間半から3時間の面接で行うという手続きで、組織で勤務することの多い本邦の心理士に合わせた流れである。

表4. 警察少年サポートセンターにおける一回型の協働的/治療的アセスメント (Single Session C/TA) の流れ

スケジュール	手順	時間	内容	参加者
事前調整	電話予約	-	事案発生後、警察少年サポートセンターの専門職員が少年と保護者に「親子カウンセリング」の利用を提案する。同意が得られたら、専門職員よりアドバイザーに電話で事案の概要を説明し、日程調整と面接の予約を行う。SCT(文章完成法)を実施する場合は、事前に少年に記入してもらう。WISCなど個別式知能検査を既に他施設で実施している場合は、その結果を持参するよう保護者に依頼する。	専門職員 保護者 (少年)
一回型の協働的/治療的アセスメント (Single Session C/TA)	面接当日 事前コンサルテーション	(15分)	事案の背景情報と「特別依頼事項(専門職員からのアセスメントの問い)」の確認。	専門職員
	アセスメントの問いと情報収集	30-40分	少年・保護者同席の面接で、非行のきっかけとなった出来事、生活上の変化、少年と保護者の主訴、少年の発達歴、家族歴等について情報収集的なインタビューを行う。主訴を「アセスメントの問い」に位置づける。	少年 保護者
	標準化された検査の実施	40-50分	少年と保護者は別室に別れる。アドバイザーが少年と「標準化された心理検査(PFスタディ/AN-EGOGRAM/描画法など)」を実施する。保護者は別室で待機し、その間にTEG-IIや日本語版AQなどの質問紙へ記入してもらう。	少年 保護者
	(休憩)	25分	少年と保護者は休憩。その間に、アドバイザーは心理検査結果を整理する(PFスタディのコーディング/TEG-IIの集計など)。「PFスタディによるアセスメント介入セッション」で取り上げる場面を決定する。	-
	PFスタディによるアセスメント介入セッション	25分	アドバイザーは少年に、心理検査の結果を手短かに説明する。特にPFスタディで囲りの認められた場面を3場面程度取り上げ、それらが非行事案や主訴とどのように結びつく可能性があるかを話し合う。そして「最初の回答とは違った、また別(オプション)の答え」を少年に考えさせ、PFスタディ反応欄の空いた場所に書いてもらう。「最初の回答」と「新たな答え」の違いをどう感じるか話し合う。最後にアドバイザーと少年で、取り上げた場面をもとにロールプレイを行う。	少年
フィードバック面接	30-40分	保護者は再度入室する。実施した心理検査の結果について、少年と保護者の主訴(アセスメントの問い)に沿って話し合う。保護者の心理検査の結果を、少年への関わり方を見直したり、保護者自身の辛さを理解する手がかりとして用いる。少年と保護者に対し、再び非行を繰り返さないための推奨を行う。少年と保護者は帰宅する。	少年 保護者	
面接当日	事後コンサルテーション	(15分)	少年や保護者の様子や、心理検査の結果について話し合う。「特別依頼事項(専門職員からのアセスメントの問い)」をもとに非行事案や家族の心理への理解を深め、立ち寄り支援の方針を考える。	専門職員
後日	報告書の作成と活用	-	上述のプロセスと心理検査の結果をまとめた「親子カウンセリング/心理的アセスメント報告書」をアドバイザーは作成し、警察少年サポートセンターに提出する。専門職員から、少年と保護者に改めて報告書の内容をフィードバックする。	-

・ クライアントと査定者の関係性へ影響を与える社会文化的要因の検討：

事例「二つの文化と言語を生きる、子どもと家族のナラティブ-白い紙粘土と緑の油粘土-」(橋本, 2018)で、子どもの問題行動の背後には「両親による養育態度」「中国語と日本語という二つの言語を用いる家族内コミュニケーション」「中国と日本という異なった文化的背景」などの要因があると整理した。社会文化的要因の強い事例では、査定者が単にクライアントを評価することは時に自身の無自覚なバイアスにより脅威となりうる。だからこそ、査定者もクライアントの物語の登場人物になることを認識しておく必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 橋本忠行	4. 巻 21-1
2. 論文標題 査定の結果をどう支援に活かすか？-チーム学校と協働的なコンサルテーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本忠行	4. 巻 39
2. 論文標題 警察少年サポートセンターにおける一回型の協働的/治療的アセスメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家族心理学年報	6. 最初と最後の頁 134-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本忠行	4. 巻 第19巻3号
2. 論文標題 心理査定の誤りが発覚...そのときどうする？ 協働的/治療的アセスメント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 274-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本忠行・坂中正義・久蔵孝幸	4. 巻 36-1
2. 論文標題 治療的アセスメントの「まとめと話し合いのセッション」におけるクライアントの体験 -EXPスケール、SEQ-5、AQ-2による5事例の分析-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間性心理学研究	6. 最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本忠行	4. 巻 36-2
2. 論文標題 水島恵一の仕事 -司法と教育・福祉を中心に-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間性心理学研究	6. 最初と最後の頁 173-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本忠行・坂中正義・久蔵孝幸	4. 巻 36-1
2. 論文標題 治療的アセスメントの「まとめと話し合いのセッション」における クライアントの体験 - EXPスケール, SEQ-5, AQ-2による5事例の分析-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間性心理学研究	6. 最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本忠行	4. 巻 17
2. 論文標題 クライアントの話から何をどう読み取るのか?-アセスメントの基本	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 橋本忠行
2. 発表標題 治療的アセスメントとヒューマニスティックなアセスメント
3. 学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadayuki Hashimoto
2. 発表標題 Collaborative/therapeutic assessment of an elderly Japanese client suffering from chronic pain
3. 学会等名 2nd International Collaborative / Therapeutic Assessment Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋本忠行
2. 発表標題 治療的アセスメントにおけるパーソナリティ・認知特性の理解とCBT技法の活用
3. 学会等名 日本心理臨床学会第35回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 橋本忠行
2. 発表標題 治療的アセスメントにおけるパーソナリティ・認知特性の理解とCBT技法の活用
3. 学会等名 日本心理臨床学会第35回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 森田幸弘・橋本忠行・神原憲治
2. 発表標題 心理面接での主観的な体験と客観的指標の関連-ウェアラブルデバイスとビデオ記録による2事例の検討(その1)
3. 学会等名 日本心身医学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本忠行・森田幸弘・神原憲治
2. 発表標題 心理面接での主観的な体験と客観的指標の関連-ウェアラブルデバイスとビデオ記録による2事例の検討(その2)
3. 学会等名 日本心身医学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadayuki Hashimoto
2. 発表標題 Single Session Collaborative / Therapeutic Assessment with Adolescent and Family in Juvenile Support Center of a Prefectural Police
3. 学会等名 3rd International Collaborative / Therapeutic Assessment Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 橋本忠行	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 未定
3. 書名 臨床心理学スタンダードテキスト：15-心理的アセスメント：11解釈・記録・報告	

1. 著者名 橋本 忠行、酒井 佳永、新井 雅、菅野 恵、小坂 守孝、野田 昌道	4. 発行年 2019年
2. 出版社 木立の文庫	5. 総ページ数 184
3. 書名 公認心理師 実践ガイダンス 1.心理的アセスメント	

1. 著者名 田澤 安弘、橋本 忠行、大矢 寿美子、近田 佳江、野田 昌道、森岡 正芳、吉田 統子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 176
3. 書名 ナラティブと心理アセスメント	

1. 著者名 小川 俊樹、高瀬 由嗣、石橋 正浩、齋藤 大輔、松本 真理子、岩佐 和典、佐々木 裕子、小西 宏幸、玉井 康之、竹林 由武、大貫 敬一、橋本 忠行、内田 裕之、安田 傑	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩崎学術出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 ロールシャッハ法の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------